

一九九五年一二月に発表された『IPCC第二次評価報告書』に一枚の図版が掲載されている。これは地球大気の上昇を阻止するためには、現状で約三五〇ppmである地球大気中の炭酸ガス濃度を一定の状態に安定させる必要がある、そのために人類は今後数百年間にどのようなことを実行すべきかの工程を提示したものである。

一例として、炭酸ガス濃度を約四五〇ppmに安定させたいとすると、現在、炭素重量換算で毎年七・五ギガトン程度である人間の活動による炭酸ガスの総排出量を、二一〇〇年までに毎年二・五ギガトン、すなわち現在の三分の一に削減し、それ以後も二二〇〇年までに毎年一・五ギガトン、二三〇〇年までに毎年一・〇ギガトンと削減していけば、数百年間で四五〇ppmに安定するであろうという推定を表示したものである。

地球にとって三〇〇年は一瞬であるが、人間にとっては異常に長期の政策である。計画経済社会のソビエト連邦でも長期計画は五年単位の目標設定であったし、日本の全国総合開発計画も十年間隔の計画であった。人間が見通せる未来はせいぜい数十年先程度であるが、地球環境問題を解決しようとするれば、一桁拡大して百年単位の構想を立案して実行しなければ解決しないという空恐ろしいことを人類に提示しているのである。

二一〇〇年の目標である毎年二・五ギガトンという炭酸ガスの総排出量は一九五〇年頃の水準であるから、これから一〇〇年かけて社会を一九五〇年頃の状態に逆行させれば目標は達成できるということになる。それだけでも大変であるが、一九五〇年から二一〇〇年の一五〇年で人口は四倍になっているから、一人あたりに換算すれば、さらに四分の一にしなければならない。それはさらに五〇年逆行して一九〇〇年頃の水準である。

今後一〇〇年かけて一〇〇年以前の状態に社会を逆行させるということである。そこで一九〇〇年頃の社会の様子を回顧してみたい。人口七六〇〇万人であった一九〇〇年のアメリカには人口一〇〇〇人について家用車は〇・一八台、電話は一七・一台が普及していた。これを人口二億七六〇〇万人である現在のアメリカに逆算してみると、家用車は約五五〇〇人に一人、電話は約六〇人に一人という状態になる。

一八九五年の日本の電話加入者数は東京で一七五二人、横浜で四一七人、大阪で四五三人、神戸で二三人であり、合計しても三〇〇〇人弱にしかない。また、日本に家用車が紹介されたのは一八九八年二月七日であるが、だれ一人購入しなかった。現在の日本が一〇〇年以前の状態に逆行するとすれば、家用車はだれも所有しておらず、電話は約九万人に一人しか所有していないという状態になる。

それ以外にも、現在の生活には必須であるが当時は存在しなかった装置はいくらでもある。最初の空調装置が設置されたのは一九〇二年。最初のインスタント・コーヒーが発明されたのが一九〇二年。最初のラジオ放送が開始されたのが一九二〇年。最初のマクドナルドのハンバーガー・スタンドが開店したのが一九四〇年である。一〇〇年以前に逆行するということは、これらの恩恵すべてが社会から消滅するということを意味する。

酷暑の夏季にも冷房装置なしで生活し、家用車は皆無にして公共目的や緊急事態のときしか車両は使わず、電話は公衆電話を共同で利用するというような生活を我慢できればシナリオが実現するかもしれないのである。もちろん、ここでは技術革新も想定していない乱暴な説明であるが、地球環境を回復することの困難さの一部は理解できる。